

◆ 今週のコメント

- 急性脳炎の報告が、2例(0歳, 2歳)あります。平成22年の累積報告数は8例で、平成15年の感染症法改正により五類の全数把握対象感染症となって以降、最も多くなっています。年齢別では、0歳が5例, 2歳, 5歳, 50歳が各1例です。病原体では、インフルエンザAH3型(5歳), 単純ヘルペスウイルス(50歳), ヒトヘルペスウイルス6型(0歳)が各1例, 不明が5例(うちヒトヘルペスウイルス6型が疑われるもの(0歳)が1例)です。
- 伝染性紅斑の定点当たり報告数は、0.50(20例)で、第33週(8月16日～8月22日)以降、過去5年平均値を上回る状態が続いています。本市では、4～5年ごとの流行周期が見られ、前回の流行(平成18年)から4年以上が経過しています。今後の動向に注意してください。
- RSウイルス感染症の定点当たり報告数は、1.03(41例)で、先週から(0.78, 31例)増加し、過去5年平均値の4倍近い報告数となっています。年齢階級別では、1歳未満が14例(34.1%), 1歳が17例(41.5%)で、2歳以下が97.6%を占めています。
- 水痘の定点当たり報告数は、1.90(76例)で、第47週(11月22日～11月28日)以降、過去5年平均値を上回る状態が続いています。年齢階級別では、1歳と2歳が各21例(27.6%)と最も多くなっています。

◆ 今週のトピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は、1.40(94例)で、前週(1.12 75例)に流行開始の目安となる1.0を超えた後、さらに増加しています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- 五類:アメーバ赤痢(腸管外アメーバ症) 1例【1月以降の累積報告数 18例】
- 五類:急性脳炎 2例【1月以降の累積報告数 8例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点67, 小児科定点40, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	1.40	94
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	13.80	552
	② 水痘	1.90	76
	③ RSウイルス感染症	1.03	41
	④ 流行性耳下腺炎	0.60	24
	⑤ 伝染性紅斑	0.50	20
眼科	流行性角結膜炎	0.40	4

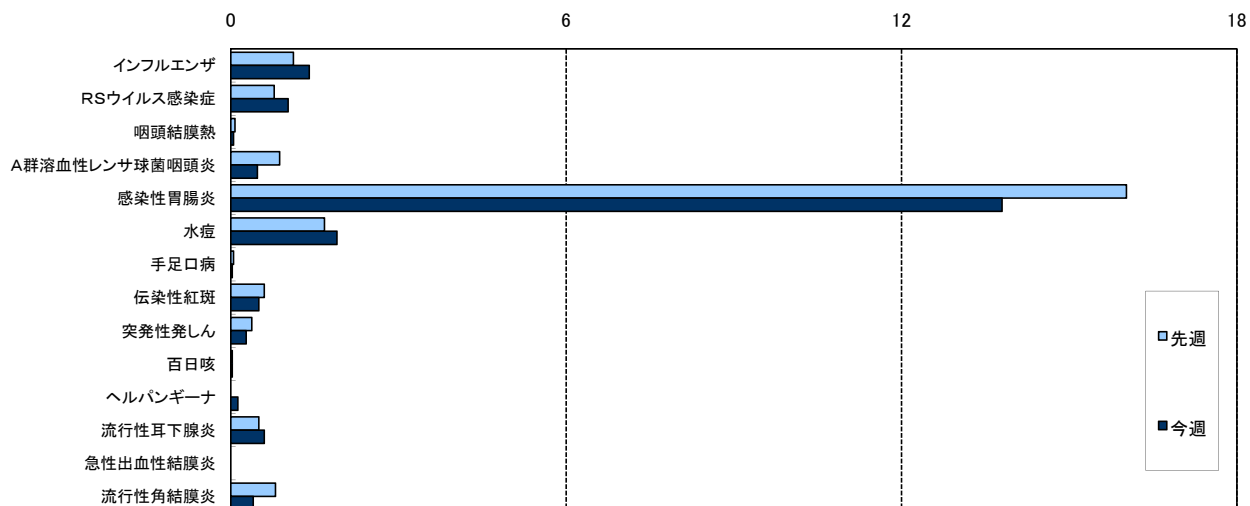
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <インフルエンザ>

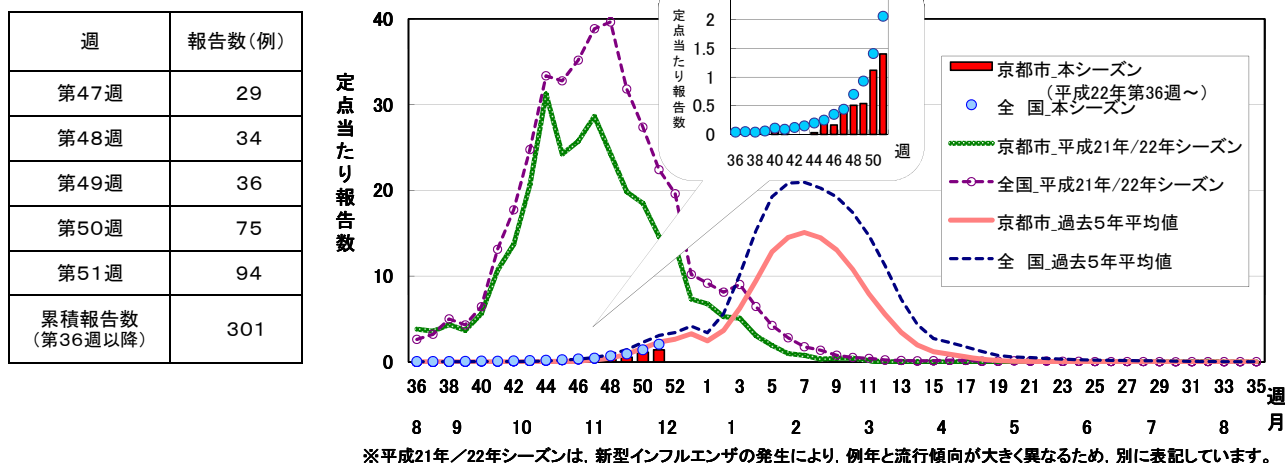
(注) 京都市のデータは、平成23年1月6日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第51週)と先週(第50週)の定点当たり報告数の比較

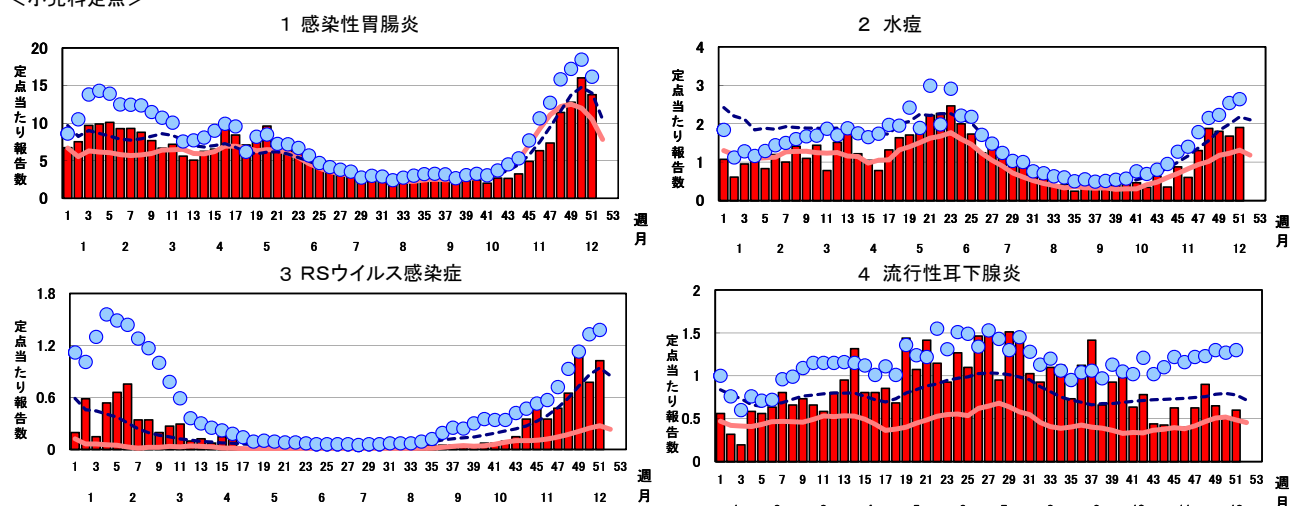


2 インフルエンザの推移

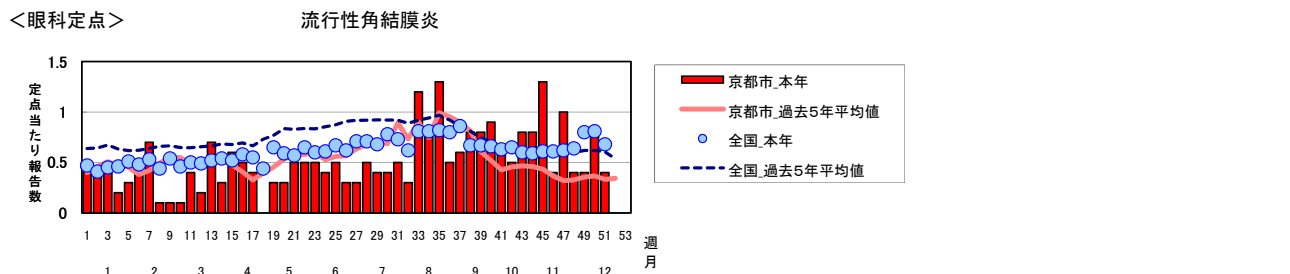


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



第51週(12月20日～12月27日)トピックス:＜インフルエンザ＞

インフルエンザの定点当たり報告数は、1.40(94例)で、前週(1.12 75例)に流行開始の目安となる1.0を超えた後、さらに増加しています。

年齢階級別割合をみると、5～9歳が35.1%と最も多く、次いで10～14歳が16.0%、0～4歳14.9%となっています。

近畿6府県の定点当たり報告数の推移をみると、滋賀県、大阪府、兵庫県で先週から約2倍に増加し、また、京都府、奈良県では1.0を超えています。

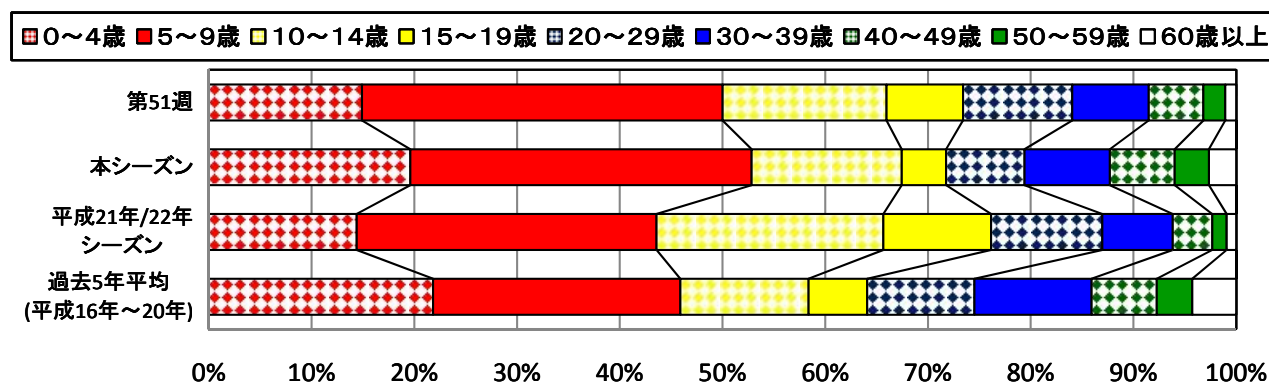
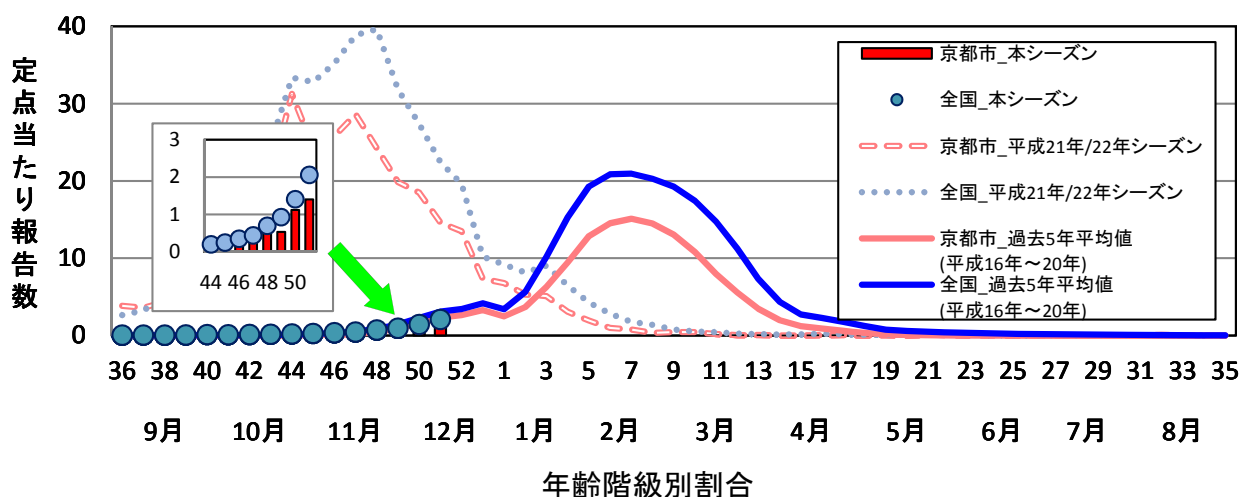
京都市衛生環境研究所での、今シーズンのインフルエンザウイルス分離検出状況は、1月6日現在、散发事例から、AH3型4例 B型1例、集団事例から、AH3型1例 B型6例(3事例)となっています。全国のインフルエンザウイルス分離検出報告数は、AH1pdm515例 AH3型702例 B型62例です。

京都市のインフルエンザ発生動向について、京都市衛生環境研究所ホームページに掲載しておりますので、御参照ください。

・京都市感染症情報 【速報】インフルエンザ発生状況

<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000091724.html>

本市及び全国の定点当たり報告数の推移



近畿6府県の定点当たり報告数の推移

